

第 34 回中四国精神保健福祉士大会 島根大会 報告

【日 時】 2018 年 11 月 23 日(金) 13:00～17:00、11 月 24 日(土) 9:30～12:00

【場 所】 松江テルサ(島根県松江市)

【テ - マ】 理念と技術の調和を求めて ～我が事・丸ごとリカバリー～

●大会報告

不安定な天候の道中ではあったが、日本海側らしい冴えた空気と、松江テルサ内外のクリスマスの近づく冬らしい雰囲気を感じながら、今大会が開会となった。

まず 1 日目は開会式の後、早稲田大学人間科学学術院 田中秀樹氏による基調講演がおこなわれた。今回の基調講演は、「リカバリーとは何か ～リカバリーの考え方と実践の視点～」と題し、田中氏がこれまでリハビリテーション医療センターや保健所等の現場での実践を経て、また、様々な大学での経験を通してのリカバリーについて講演した。リカバリーの概念は、米国の当事者運動から発信された概念である。当時、精神障害者の脱施設化を図ることはできたが、デイケアで 1 日を過ごすこととなり、入院中や施設にいる状態と相違なかった。C.ラップの「地域にいた(社会的場所)が、未だ地域ではなかった(社会的関係)のである」という言葉がそれを物語っている。その原因を招いたのは、当時ベトナム戦争等にアメリカが予算をつぎ込むことで、福祉の予算も削られた背景があったと田中氏は言う。田中氏が海外の視察をした際、入所施設では、患者さんが活気に溢れているわけでもなく、ただベッドに横たわっていたり、玄関口でタバコを吸っていたりという姿が目立っていた。病院からは脱したというのに、脱した先での生活はまるで入院している時のようであったと述べられている。また、多くの当事者がデイケアを利用していたが、そこではただご飯を待っているだけと言えるような姿、市民として生活しているとは言い難い。それを C.ラップは「ベルリンの壁のようだ」と評し、ベルリンの壁に見立てた図を作成している。例えば、貧困、病院、保護的な生活の場(グループホーム等)、保護的な就労の場(日本でいう就労支援施設)等を壁とし、それを壊していかなければならないとしていた。その中で、田中氏がニュージーランドのデイケアを見学した際、デイケアは法律で 1 週間しか利用できないと決まっているという。「当事者が本当に通うべきは、デイケアではなく、働く場である」「障がいのある人のための場を開拓するのではなく、一般の人の中に入れていける場を作っていかなければならない」という考え方である。田中氏は、その考えに触れて、我々はベルリンの壁を作ってしまったのかもしれないと感じたと述べる。実際にベルリンの壁も見てきたという田中氏は、思ったよりもベルリンの壁は簡単に壊せそうだと感じたそう。リカバリーを阻害するものは、既存の多くの精神保健資源や専門家の押しつけ方針、社会の偏見・差別ではないかとも述べられ、我々支援者側から、当事者に対して壁を作ってしまうよう、また、壁があったとしても壊していけるような支援ができるようにしたい。

続いて、リカバリーに関連する概念としてレジリエンス(元々個々人に備わる復元力、弾力性、しなやかさ)や、バルネラビリティ(弱さ、傷つきやすさ、脆弱性)についての説明を経て、リカバリーに基づく援助についてのテーマへと移る。就職での社会復帰を例に挙げ、日本のやり方は「訓練してから就職」であるが、世界では「就職してから訓練・継続的援助」というやり方であるという。前者のやり方では、訓練によって当事者を変化させてしまい、関心や動機づけを下げてしまうと考えられており、後者は当事者の希望・興味や技能に合致

した職を探すことで、当事者のリカバリーに対する意識を高めると考えられている。いかに当事者の希望やストレングスにいち早く気づき、「まず本人がやる」という形につないでアクションを起こせるかが鍵となる。

最後に、田中氏が「援助」と「支援」の言葉の違いについて、「援助」は援助者が主体となって実践や技術の提供をおこなうことと述べ、「支援」は利用者が主体で受けるものと述べる。普段何気なく我々が使っている言葉ではあるが、意識して当事者への適切な支援を提供したいものである。

パネルディスカッションでは、医療、地域、当事者の立場から、リカバリーにかかわる実践報告がおこなわれた。医療の立場からは、山口県立こころの医療センター 各務恵美氏、地域の立場からは、愛媛県松山市保健所 越智敏行氏、当事者の立場からは、地域活動支援センター ビ・フレンドイング所属のピアカウンセラー 目次孝之氏の3名による、それぞれの発表があった。

医療の立場からは、Dr.やNs等のピラミッド型の力関係ではなく、平等なチーム医療を通し、多職種でおこなう専門プログラムを実施。その中で、PSWはマネージャーのような立場からの支援に取り組んでいると発表があった。多職種だからこそ、様々な視点があり、そこに様々な患者さんがいて、みんな違うことを認め合っている支援があると各務氏は述べる。今後の支援も、「金魚の水合わせ」のような、次の環境に繋がる支援をおこないたいと抱負を述べられていた。

次に、地域の立場からは、平成24年度よりピアサポーターの活用を図り、地域移行・地域定着支援事業に取り組んでいるとの発表があった。ピアサポーターの活躍もあり、昨年度末までに159名の地域移行につながったという。また、既存の事業では事業に乗り始めてから利用という形であったが、今年度から精神障がい者ワンステップ事業を立ち上げ、長期入院の方を対象に、事業に乗り始める前段階から地域生活を体験してもらったり見学してもらったりして、退院や地域への移行を目指したいと考えているとのこと。ピアサポーターを活用した事業を通して、患者さんが退院し、地域につながっていく姿を、かかわったピアサポーターに見てもらうことで、ピアサポーター自身の力の肯定や高まりが認められる。住み慣れた地域で、ごく当たり前の生活が実現できる地域づくりを更に目指したい、と越智氏は締めくくった。

そして、当事者の立場から、ピアカウンセラーの目次氏の体験発表から、目次氏自身が体験の中で感じた病気や支援者への葛藤、ピアカウンセラーになろうと思ったきっかけ、ピアカウンセラーになってからの葛藤等に触れた。今回の目次氏の発表は、当事者が支援者に対して抱いている思いや本音を赤裸々に表現されたものであり、心を打たれた参加者も多かった。まず目次氏の発表の中で多くの参加者に衝撃を与えたのは「やりたいことはあったが、それを伝えても医者やその他の支援者は微妙な反応だった。自分の人生だから、自分で人生設計をしたいのに、既存のサービス等に合ったものを選択しないと、“良い”と言ってくれない。支援には枠組みがあって、枠外のことにはスルーされてしまうんだと感じた。」という内容だったのではないだろうか。その際、目次氏は、「支援者は私のことを何もわからないくせに、勝手なことを決められたくない。人が何と言おうと、やりたいことをやりたい。」と一念発起し、ピアカウンセラーの道を選んだという。その後、目次氏がピアカウンセラーとしての活動をしていく中で気づいたことは、とにかく相手に自分のことを知ってもらわないといけないということだった。一方的ではなく向き合うことで、次第に支援者に対する意識が変化していったそう。支援者にも悩みがあり、その共感できる部分に触れることで、支援者に『人間味』を感じ始めた。時に私たちPSWが自分の感じていることを当事者に伝えることがあるが、それが当事者に寄り添う形となり得ることを、目次氏が率直に証明してくれたようでもあった。目次氏は、その経験も踏まえて、自身のピアカウンセリングの活動にも「私はこんな人間だ」ということを伝え、相手に知ってもらうことから始め、徐々にピアカウンセリングの利用者を獲得していった。そして、ピアカウンセリングを通し、相手の話を聴くことでエン

パワメントにもつながると感じているそう。最近、「目次さんは空気みたいな人だね。」と言ってもらえたことが、諦めずに生きてきてよかったと感じた瞬間だったと笑顔で語った。最後に、当事者と支援者という関係の枠組みを超え、対人間同士、当事者も支援者から必要とされる存在になりたいと述べられた。

次に、特別報告では、「離島の精神科医療を守りぬく ～隠岐病院からの報告～」として、隠岐広域連合立 隠岐病院 金坂幸之氏より、隠岐諸島での隠岐唯一の精神科病院としての役割と、医師不足による危機に対し、暮らし慣れた地域での生活を守るための取り組み等について発表があった。受け身での医療ではなく、病院側から地域の要望や現状を把握し、つなげていく攻めの医療へとシフトし、地域住民との意見交換をおこないながら、“住民の病院”を目指した。また、限られた社会資源を活用し、そしてその社会資源である関係事業所等からの支えもありながら、隠岐病院の維持につながっていると金坂氏は感じているという。恐らく、隠岐諸島だけではなく、各地の山間地域等にも似たような現状の病院は存在すると思われる。本人の希望と裏腹に、ただ利便性で暮らし慣れた地域から離れてしまうような医療の提供とならないために、何ができるのか、このような状況に近い地域での取り組みにも意識を向ける必要がある。

2日目は、4つの分科会に分かれ、各テーマについて実践報告やグループワーク等を通し、考えを深めた。第1分科会では「SAT-G ライトを活用したギャンブル障がい支援」として、島根県立 心と体の相談センターで開発された「SAT-G ライト」という認知行動療法について、講義と実技を交えた学びの場となった。第2分科会では、生活・就労の2つのフィールドから、各2名の実践報告をおこない、事例を交えながらの取り組みについて発表と、グループワークをおこなった。第3分科会では、ワールドカフェをおこない、「それぞれのリカバリー」のテーマのもと、自身の夢や希望についての自由な意見交換の場となった。第4分科会では、「インシデントプロセス法を用いた事例検討」をテーマに、「社会的問題を抱えるアルコール依存症患者へのかかわり」、「病気と向き合いながら、子どもと共に暮らしたいシングルマザーの方への退院支援」の2事例を通し、状況を読み解くための情報収集や課題の分析・具体的対応策の打ち出しをおこなった。

縁結びの地である島根県での大会で得たことやお縁を次の年につなげ、また明日からの実践に活かしていきたい。次回、来年の中四国精神保健福祉士大会の舞台は、晴れの国 岡山県へ。香川県からは瀬戸内海を挟んですぐ隣。距離としてもとても近いので、是非来年は当協会からも多数のご参加と、一緒に熱い2日間に行きましょう！

